

神話概念の変遷 I

—Mythos の語史に関して (上)—

天 沼 春 樹

1. 神話・意味の織物

ギリシア神話第一の英雄ヘラクレスの武勇のひとつに「レルネーのヒドラ退治」というのがある。ヒドラとは水蛇の怪獣で、アミュモネーの泉のそばに棲み、巨大な体に九つの頭をもち、ちょうど八岐大蛇のようなすがたをしていて、平原に出てきては人畜を害したという。ひとつの頭を切り落とすと、その切り口から新たに二本の頭が生えて毒息を吐いて襲ってくるので、さすがのヘラクレスも苦戦を強いられたと伝えられている。ひとつの首を切り落とすと、また新たな首が鎌首をもたげてくるという寓意は、この神話自身にあるそれとは別に、我々が Mythos (神話) そのものの本質に思いをめぐらそうとするに、いさぐさ感概に似てはいないだろうか。「神話とはなにか。」「神話の本質はなにか。」という問いへの答えは、19世紀後半に活躍したベルリンの哲学者、文献学者オットー・グルッペ Gruppe, O. (1804—1876) が『ギリシアの祭祀と神話』の序文ではからずも述べているような結果をみちびくに違いない。「様々な神話学が、およそ研究者の数だけある。ある者は神話のなかに過去の出以事の伝承的記憶をよみとっているし、他の者は神話のなかに深い哲学的真理をみとめている。さらに第三の者にとっては、あらゆる英雄の誕生は朝の太陽を、死に瀕した英雄はみな夕陽を比喩するものになる。一方、またべつの者にとっては、神話のなかの形象はすべて太陽の一年の巡りをあらわすものとなる

のだ¹⁾。」

紀元前3世紀のエムペードクレス以来、神話に関する諸学説、解釈は枚挙にいとまがなく、また神話という総称で括られる物語の意味解きはもちろんのこと、神話 Mythos という言葉自体も歴史的に様々なニュアンスをとりいれて用いられてきた。古典言語学者のフランツ・ドルンザイフは、「いわく言い難いあらゆるものを含んだ意味の織物」という表現を使って次のように書いている。

「Mythos という語は近代において様々な経緯を経てきた。150年前には人々はこれを Mythe とよび、Hymne とおなじに扱って、朗らかな古代人の素朴な作り話 (Fabelei) を意味していた。Mythus のほうはしたがって神話学者の専門的対象とされた。しかし研究者でない者が Mythos を口にするようになっていらい、この語はいわく言い難い、あらゆるものを含む意味の織物となった²⁾。」

ドルンザイフのこの短い記述の背後にある実際の言葉の歴史は後述することにして、以上の二つの引用文が、神話という概念を取り扱おうとするさいにまずたちあられる議論であるし、また率直な感慨でもあるわけである。さように神話は多様な解釈を生んできたし、また生みつつある。また、詩人たちをはじめ、諸芸術にたいしても豊かな素材を供給しつづけてもきた。それならば、視点を転換して神話というひとつのテキストをめぐる人間の営みをあとづけることによって、即ち、神話の解釈史、文学作品に現れた神話的なものの系譜を辿ってみるといふアプローチのしかたで神話を眺めかえす手立てもなくはない。神話観・神話概念のうつり変わりを追っていく作業をとおして、神話 Mythos のもつ特質、例えばあらゆる概念をとりこんでいく「開放性」Offenheit であるとか、「感応しやすさ」Sensibilität といったものをも浮かびあがらせることもできるのではないだろうか。

ところで、実際にそのような視点がらドイツ文芸学上で神話と文学の関わりを論じた試みがないわけではなく、その試みの比較的早い時期のものとしては、文芸史家フリッツ・シュトリヒ Strich, F. (1822—1920) の手で1910年に公刊

された“*Mythologie in der deutschen Literatur*”がある。この著でシュトッヒが意図したことは、「各時代の各詩人が神話について何を理解していたか、神話の本質の捉え方がどのように変わっていったか、深まっていったか、そしてその変化がドイツ文学の展開とともにどのように継承されていき、ひいては個々の時代とその詩人がその理念をどんな神話の形をとって具体的表現に表すことができたか³⁾」というものであった。

シュトリッヒの論文は、18世紀のクロップシュトック、ヘルダー以降、19世紀末のヴァーグナーにいたるまでの文学史上の神話観の変遷をきわめてオーソドックスに整理してくれている。さらに、現今の神話学や記号論、そしてシンボル論などは無縁の、従って我々には大変わかりやすい見取り図を示してくれる。

一方、思想史的な関連や個々の事例に関しての綿密な論究はないけれども、*Mythos* という言葉そのものの語史に関して調査した報告が、ヴェルナー・ベッツ Betz-Werner (1912—) によって出されている⁴⁾。この報告は、1978年1月5日の『フリードリヒ・マウラー記念論文集』に発表され、ついで論文集『19世紀文学における神話と神話学』のなかに加筆して載せられた。ベッツはこの論文のなかで、ギリシア語からの借用語であった *Mythos* なる語が、ドイツ語上でどのようなニュアンスをこめられて用いられてきたかの変遷、あるいは多様な意味をとりこんでいくようになる流れを短い紙幅ながら手際よくまとめている。ただ、ベッツ自らも認めているように *Mythos* という語に関しての語史的研究が今日でも十分に行われておらず、とくに16世紀から18世紀半ばまでの文献上の調査が不十分であることは否定できないわけであるが、それでもなお *Mythos* なる語の評価の上がり下がりや、ロマン派以後の神話研究の進展といった流れをつかむうえで極めて示唆に富む報告である。本稿においては、この前記両論文を参考にしながら、そして私自身の調査の結果をそれ補填するかたちで加えて、*Mythos* の言葉としての意味の変遷を主に、その発言者が *Mythos* という言葉に託した思い入れの強弱を測ってみたい。

2. ドイツ語における Mythos の語義変遷

ギリシア語の *μυθος* からの借用語である Mythos が、ドイツ語で書かれた文献のなかに最初に現れているのは、現在確かめられるかぎりにおいて、1536年に出たダシュポディウス Dasypodius の『独羅辞典』*Dicctionarium Germanico-Latinum* が最初である。ダシュポディウスは当時シュトラースブルクでギリシア語の教鞭をとっていたスイス人文献学者である。Mythus のその最初の語義としてつぎのような記述がみえる。

erdichte Märe, Mythos, latine Fabula

作り話, ミュートス, ラテン語のファブラ (物語)

事実を含まない創作された物語、つまり「作り話」、これが最初に登場した意味である。ヴェルナー・ベッツによれば、辞書には Mythos の語形で現れているが、ドイツ語で書かれた文献にはまだ使用例がみつからず、この状態が以降 200 年あまり、18 世紀初めまでつづいたという。もっともギリシア語の *μυθος* ないしは、ラテン語での同義語としての *fabula* などは、例えば聖書にしばしば現れ、ドイツ語に翻訳される際、ルター以前の 15 世紀には《*lügmere* (*Lügmäre*)》と、ルターによっては《*Fabula*》と訳されていた。ラテン語の *fabula* が 16 世紀において「作り話」とか「寓話」という意味をもっていたことは、シモン・ロート Rot, Simon が 1571 年に出した外来語辞典 *Teutscher Dictionarius* で確かめることができる。それによると、《*Fabula, Fabel/meer/ein sag/sie sey war oder nit*》となっている。やはり、「作り話、伝説」の意である。

こういう語義のラテン語の *fabula* を介して Mythos は新約聖書ではつねにネガティブなアクセントをつけられて用いられていたようである。

「テイモテへの第一の手紙」のなかに次のような一節がみられる。

1. Thim. 4, 7. *bebelous kai graodeis mythous—ineptas autem et aniles fabulas*

《*ungeistliche aber und altvettesche Fabeln*⁵⁾》

この用語を含む4章6—7節の文脈をつなげてみるところである。「——これらのこと（神の福音）を兄弟たちに教えるなら、あなたは信仰の言葉とあなたの従ってきたよい教えの言葉とに養われて、キリスト・イエスのよい奉仕者になるであろう。しかし、俗悪で具にもつかない（迷信のような）作り話は避けなさい。」同じく同書第1章14節では Irrlehre 「誤った教え」とまたティトスへの書第4章7節では, Altweibergeschwätz 「老婆の馬鹿噺」というように信憑性のない戯れ事といったニュアンスが強い。

さて、ダシュポティウスから2世紀近く後の1712年にニュルンベルクで Die teutsche Mythologie oder Beschreibung heidnischer Götter なるタイトルを持つ神話伝説集が出版された。Mythos からの派生後語である Mythologie まず先に現れ、Mythos 自身は1741年刊のアダム・フリードリヒ・キルシュ Kirsch, Adam, Fr. による Cornucopialinguac Lateine に次のような記述で出ている⁶⁾。

Mythos, idem quod <Fabula> vel <Narratio>; Fabel

寓話（ファブラ）に同じ、むしろ物語（ナラティオ）に近い。

辞書上の意味においてはこの時期まで大きな進展はみられないし、神話という言葉はギリシア・ローマ神話をさして使われるわけではあるが、その際にドイツ語で Mythos と表記するよりはまだ *μυθος* というギリシア語で書くことのほうが一般的であったようである。たとえば、ベッツによる指摘であるが、ゲーテの日記、1774年4月5日の記述にこんな断章がみられる。

Da *μυθος* erfunden wird, werden die Bilder durch die Sache groß, wenns Mythologie wird, werden die Sache durch die Bilder groß⁷⁾.

これにつけるベッツのコメントとして、ドイツ語中では Mythos はまだ十分にこなれた語彙ではなかったのだろうという推論がある。これについて1801年に出たカンペ Campe の外来語辞書《Wörterbuch zur Erklärung und Verdeutschung der unserer Sprache aufgedrungenen fremden Ausdrcke》がひとつの傍証になっている。この辞書によると、《Mythologie, Fabellehre/ Mythos, eine Dichtung》のごとく、Mythologie は神話の学、Mythos は

詩作を意味していて、またこれにくわえて同時代の言語学や研究者たちはドイツ語形の Mythos のかわりにギリシア語の *μυθος* を好んで用いるようだとしている。また、1813年に出た第2版には次のように説明がつけられている。

Mythologie, Fabellehre, Götterlehre...In sofern das griechische Mythos eine fabelhafte Geschichte bedeutet, antwortet ihm das deutsche Sage vollkommen...

Mythos, eine heilige (die Götterlehre betreffende) Sage aus der Vorzeit, welche den Dichtern Stoff zu ihren Dichtungen gab...Göttersage...⁸⁾

ギリシア語の Mythos が伝説的物語という意味であれば、ドイツ語の Sage が完全にこれにあたり、また、Mythos は詩人たちに詩作の題材を提供しつづけてきた太古の神聖な Sage であるというこの解説には、とくに意味の拡大も研究の進展もみられないが、すくなくともダシュポディウスや聖書翻訳にみられたネガティブな評価が緩和され、専ら神話の文学的特性が問題になっているわけである。

時代はまた遡るが、Mythos そのものに関連した動きを眺めてみると、1763年にベルンでクリスティアン・T・ダム Damm, Chr. T. の『古代ギリシア・ローマ世界の神話入門』なる書物が出版されている。邦訳すると神話一語でもこと足りるが、原語では Götterlehre und Fabelgeschichte である。このダムは神話を専らアレゴリーで解釈する当時の代表者で、ひとつの典型的解釈の模範となるものである。もうひとり、当時の学者で一般に影響を与えたのはフランスのアントン・バニール Banier, Anton で、いわゆるエウヘリズムと呼ばれる神話は歴史上の人格を神話に置き換えて表現したものだとする古代ギリシアのエウヘーメロス以来の解釈をおこなった。(この説はのちにヴィーラントあたりも信奉した。) このバニールの Götterlehre をシュレーゲル兄弟の父であるヨハン・アドルフ・シュレーゲル Schlegel, J. A. がドイツ語に翻訳する仕事をしている。そして、当のバニールの本文よりも父シュレーゲルの書いた序文は当時の神話観としては異例なものではあるまいか。

「古代の神話の体系は世界中が昔はこの愚かな馬鹿げた代物のごった煮を真実だと信じるのはこけんに関わるとして、支離滅裂な途方もない物語だとみなしてきた。しかし、神話を認識することは学問上不可欠なことなのである。それなしには古代の文書をけして理解できはしない⁹⁾。」

これは神話などというものは無用のものという非難への擁護ともいえるし、また神話を学問的に正しくとり扱おうという気運の表れでもあるだろう。

神話についての認識を深め、後世に影響を与えているのは、まずヴィンケルマン Winckelmann, クリスティアン・ゴットロープ・ハイネ Heyne, C. G. そしてヘルダー Herder, J. C. の三人があげられる。まず、先の二人より口火が切られ、ヘルダーに代表される神話観が形づくられ、後のロマン派の神話研究へつながっていくというプロセスが考えられるのではなからうか。まず、ヴィンケルマンは神話を不可視なもののアレゴリーの織物と見なしていた。ついで、ハイネは古代における神話の起源を古代人における三つの「欠如」に由来すると説いた。すなわち「知識の欠如」「表現力の欠如」「客観化と自我の欠如」がそれである。たとえば、天上を走る稲妻をゼウスが人類に投げ落とす鉄鎚と表現し恐れるような古代人の思考を想定していたわけである。ただ、古代人の非合理的思考の所産であるからこれを低く評価しようというのではなく、あくまでも客観的に定義しようとしていて、とくに目新しいのは、Mythos について原始神話 Urmythologie と後世の詩人によって再話再構成された Dichtermithologie とを明確に区別しようという点にある。ハイネと親交があり互いに影響を与えあう関係にあったヘルダーは、その使用する用語としては統一を欠いて、例えば1782年に出た Geist der hebraischen Poesie, のなかでは, Fabel, Mythos, poetische Sage des Ursprungs, Dichtung, Geschichte und Allegorie などを厳密な区別もなく使っているが、彼の当時としては斬新な試みであったオリエント神話の比較研究から、神話成立の諸段階なる考えをひきだしている。ごく簡便にいとてしまうと、ヘルダーは古代ヘブライ人やインド人がそうしたような自然から、つまり人間の本性から生じたところの原始神話の段階と、為政的・政治的意図をもって体系化された神話の段階（例え

ばゾロアスター教典のアベスタ), そして, 彼が *Kunstmythologie* と呼んだギリシア神話に代表される詩人たちによって再構成された段階の三つの層を想定していたわけである。

ヘルダーはそのほかにも *Paramythien* という形式で, 神話になぞらえた教訓詩を創作している。いずれにしてもヘルダーをひとつの軸にして当時の知識人たちの神話観をのぞくことができる。そして, つねに彼らの関心の中心は *Urmythos* であったようにおもわれる。時期は前後するが, 『メシアス』の Kloppschuttok は, 1760年以後, 北欧神話の復興や神話をドイツ精神の原点とみなす立場で, スカンジナビアやケルトの文献の蒐集に力を入れていたわけであるが, すでにここにドイツ精神の故郷に思いがむくときに必ずたちあわれる神話というもののイメージの典型がみえているのではなからうか。

アルノルト・カンネ Kanne, J. A (1773—1824), フリードリヒ・クロイツァー, そしてヤーコブ・グリムといったロマン派の学者たちによって, いわゆる神話学の基礎がつけられたわけであるが, その学説を追うよりもむしろ, *Mythos* に極めてポジティブな評価や意味あいをあたえたこの時代の人々の論調を追っていくと, おのずと彼らのもつ共通の意識「太古, 或いは古代において万物は混沌のうちにもひとつのもののうちに統一されていた。」というむしろ感情と呼んだらいいようなトーンに出会う。

カール・フィリップ・モーリッツ Moritz, K. Ph. (1757—1793) は1791年にその著《*Götterlehre oder die mythologischen Dichtungen der Alten*》のなかでこんなふうな神話観を述べている。

「神話文学のなかには太古の失われてしまった歴史の痕跡が埋まっているのであるから, なおいっそう尊いものとなろう。それというのも, 神話文学は空中へヒラヒラと舞い散っていく空虚な幻影や単なる機知の戯れではけっしてないのだから。そうではなくて太古の出来事と内的にも縋い合わされている。だから, その解明にあたっては単純なアレゴリー解釈だけではうまくいかないのだ¹⁰⁾。」モーリッツはさらに, 太古における詩と真実の混合物が神話なのだともまでいっている。ベルナー・ベッツの言を借りれば, ネガティブな響きをも

っていた Mythos なる言葉がここにいたって次第にポジティブな色合いを帯びている。つぎの、ゲレス Göress やシュレーゲル、そしてノバーリス、シェリングらの神話に関する言及をならべてみれば、そこには自ずと一つの志向が現れでてくるように思われる。

まずゲレスは *Mythengeschichte der asiatische Welt*, 1810 のなかでこう書いている。「ひとりの神の従者が、そしてひとつの神話が太古にあった。ひとつの教会、ひとつの言語があった。ひとつの神格が世界全体を支配し、ひとつの宗教が全世界を覆っていた。ひとつの掟が、根本にはひとつの世界観が、あらゆるものに通じたバイブルが、生き生きとあたかも民族や種族が永遠に若々しく湧きてるがごとくに存在した¹¹⁾。」同じ論調をあのノバーリスの『キリスト教世界およびヨーロッパ』に読みとれることはいうまでもないが、そのノバーリス自身はギリシア神話のなかに自然宗教の神話的翻訳をみてとり、ついに神話は彼にとってあらゆるものを包括する至高のポエジーにまでなっている。彼はある書簡のなかで、メルヒェンとまったく同じ意味で *Mythologie* を用い、こんなふうに定義してみせている。「ぼくがここでいう神話 (*Mythologie*) とは、真実を極めて多様に象徴する自由で詩的な創作のことだ¹²⁾。」

もう一つの例を引いてみよう。

「言葉の定義的意味での *Mythologie* というのは、歴史がまだ文書に記述されておらず各々が口承されていた時代の伝説を含む物語である。さらに広い意味では、歴史がすでに長いこと文書にも記録されるのがあたりまえになった時代にも、人々が口伝えとして伝えている物語も *mytisch* と呼ぶことができる。[……] よりはっきりした、妥当な意味で考えれば、*Mythus* なる語の意味は歴史的、ないしは疑似歴史的記述にまでも及び、そのかぎりにおいて *Mythu* は *Parabel* (譬え話) や *Allegorie* (寓意譚) とは異なる¹³⁾。」

これは、シェリングが “*Über Mythen, historische Sagen und Philosopheme der ältesten Welt*, 1792” のなかでのべている神話観であるが、さらに民族の源泉に話が及ぶや俄然とその論調は昂ってくる。

「民族とは、単なる空間的共存ではなく、共同の意識があって、その根本に

は共通の神話的世界観が存在している。要するに Mythologie はそれ自体民族の運命である。」

シェリングの『神話の哲学』*Philosophie der Mythologie* を壮大ではあるがまったく空想的考えであると評しているフリッツ・シュトリッヒは、しかし、それと同時に彼を「神話を詩的な、あるいは哲学的虚構だという考えを退けた最初の人」であるとも評価している。シェリングが神話を《内側から》、すなわち固有の内的な原理にしたがって理解せねばならない《独立した世界》とみなすべきだと主張した、すなわちレビストロス風にいえば未開の思考を想定していたことへの着目である。

これにあわせて F. シュレーゲルの《新しい神話》のよく言及される一節をつけくわえれば、ほとんどロマン派の神話観を過不足なく伝えられるのではないだろうか。シュレーゲルによれば、神話はいつものは意識にとらえることができないものが、感覚的・精神的に直観可能なものとなり、確実にとらえられる。それはちょうど肉体にとりまかれている魂が、肉体をとおして我々の眼にかすかに映り、我々の耳に語りかけてくれるのに似ているという。「古代の神話はすべて若々しい空想の最初の開花であり、感覚世界におけるもっとも身近なもの、もっとも生き生きしたものと結びつき、それに似せて形成されたものである¹²⁾。」そして、いまその神話に値するものが欠けているという喪失感と、それへの憧憬が、*Mythos* というキーワードに凝縮されているのである。《新しい《神話》というそれ自体矛盾する用語法は、神話という言葉が過去という時間の産物という扱われかたから、現在と未来をも包括した《理想》という意味あいを獲得したことにほかならない。

Mythos という言葉が、生みだす心象世界が、かつては迷信にみちた誤った言説であり、作り話にほかならない。あるいは古代人の迷盲が生みだした美しい夢から、18世紀にいたって至高の詩作の名を冠されるにいたる。しかし、それは芸術的、精神活動の領域でのことであり、いかにロマン派の詩人たちが、*Mythos* なる言葉を彼らの理想と同義語のごとく使いはじめたとしても、一般の意識のうえでは、まだ《古代人の美しい夢物語》の範疇を出ていないという

のが本当のところではないだろうか。Mythos が大衆レベルでの用語として日常世界に出てきたとき、またひとつ意味が曖昧なままで言葉のみが闊歩しはじめるというプロセスが、これ以後の Mythos のたどる道である。それは、学問としての Mythologie（神話学）の進展とは別に、社会心理学的問題を孕んだ現象としてとらえかえすべきもののように思われる。これよりは『神話概念の変遷 I』の（下）として、現代にいたるまでの用語例をたどっていくことになるが、これ以後は専ら、意識的にまたさらには恣意的に Mythos あるいは Mythos なる語を操っていく人間の行為へまなざしをむけていこうというのが、当面の課題である。

〔付記〕

この論攻は、1986年5月15日、中央大学で行われた日本独文学会春季研究発表会で発表した『神話概念の変遷のための語史的パノラマ』と題する研究発表に大幅に加筆したものの前半部である。後半部は（下）として、別に発表する予定である。尚、同研究発表の要旨は、以下にあげる「日本独文学会研究発表要旨」のとおりである。

「古典ギリシア語学者、フランツ・ドルンザイフは、Mythos をいわくいいがたいあらゆるものを含んだ意味の織物と呼んでいる。Mythos が外来語としてドイツ語中に現れるのは16世紀からであるが、当時は「作り話」「愚にもつかぬ馬鹿噺」などのネガティブな扱われかたをされていた。18世紀にはいり Winckelmann, C. G. Heyne, Herder 等を初めとして、Mythos が学問的な思考の対象にされていらい、特に神話学者以外の人々がこれを口にするようになると、様々な意味づけや解釈の試みがあらわれた。ロマン派の人々によって極めてポジティブな意味付けをされ、そして、本格的な神話学（Kanne, Grimm, Creuzer）が始められる。

。さらに19世紀には、ニーチェ以来大衆レベルの語彙となってますます曖昧になって、たとえば「20世紀の神話」のような政治スローガンさえ生まれてきた。本研究発表では、16世紀から20世紀にいたる Mythos の用例を拾い集め、ド

イッ文学と神話の関わりというテーマのための基本的俯瞰図を描いてみる。できれば、比較文化的意味で明治以後の日本語に Mythos がどのようにとりいれられたかについても若干触れてみたい。」

註

- 1) Gruppe, O., Die griech. Kulte und Mythen, Leipzig, 1887, Vorw.
- 2) Dornseiff, F., Die griechischen Wörter im Deutschen, Berlin 1950, S. 89.
- 3) Strich, Fritz, Die Mythologie in der deutschen Literatur von Klopstock bis R. Wagner, 1910.
- 4) Betz, W., Vom ‚Götterwort‘ zum ‚Massentraumbild‘, Zur Wortgeschichte von ‚Mythos‘, in Mythos und Mythologie in der Literatur des 19. Jahrhunderts, Frankfurt am Main, 1979.
- 5) Ebd. S. 12.
- 6) Ebd. S. 13.
- 7) Goethe, J. W., Tagebücher, 5. 4. 1774, S 101, Artemis Verlag Zürich und Stuttgart, 1964.
- 8) Betz, S. 13.
- 9) Schlegel, J. A., das Zitat aus zweiter Hand v. Strich. Ebd. S. 9.
- 10) Moritz, K. Ph., Werke 2, Insel, 1981. S. 611.
- 11) Görres, Mythengeschichte der asiatische Welt, 1810.
- 12) Novalis, Brief, S. 375.
- 13) Schelling, Werke I, 3 ff. und. 24.

※尚, 詳細な脚註は本論文(下)に付す予定である。